

血液バイオマーカーでみる高齢者の心不全

◎久保 亨¹⁾

高知大学医学部 老年病・循環器内科学¹⁾

高齢者慢性心不全患者の増加は著しく、早期に患者を診断し適切な治療介入を行うことが重要である。一方で、高齢者は自覚症状に乏しく、心不全の診断に至っていない例も少なくない。このような背景の中で、血液バイオマーカーを用いた早期診断が推奨されるようになってきたが、地域医療の現場において、どの程度の頻度でそのような患者が存在しているかは分かっていない。我々は、高齢者の多く受診する診療所において、心不全の既往あるいは器質的心疾患の診断を受けていない通院患者を対象に、心不全の早期診断に関するバイオマーカーの有用性についてN末端プロ脳性ナトリウム利尿ペプチド（NT-proBNP）を用いて検討を行った。本講演では、NT-proBNP 高値を示す患者の頻度とその患者背景、さらに心不全診断に至った割合等について報告する。また、心不全に陥った高齢患者に対しては、どのような治療介入が予後を改善させるのであろうか？心臓疾患そのものの治療はもちろんであるが、近年、栄養が注目されている。心不全と栄養の関連について、当科の研究データとともに紹介したい。最後に、高齢心不全患者のなかに、野生型トランスサイレチンアミロイドーシス（以前の診断名の老人性アミロイドーシス）が少なからず存在していることが明らかとなっていった。進行性の予後不良の疾患であるが、高感度心筋トロポニン T が本疾患の鑑別に有用であること、そしてこの血液マーカーを用いた当科の診断ストラテジーについても報告する。本講演が、高齢心不全患者の病態理解と臨床の現場での一助になれば幸いである。